

佳作

一期一会

鹿児島県 鹿児島中央高等学校二年 森木 海音

奇跡の出会いを信じる人はいるだろうか。

高校の入学説明会のとき、見たことのある顔の人が前から歩いてきた。目が合う。相手がハツとした表情をしていたので、私は確信した。そして声をかけた。

「やっぱり、久しぶり、覚えてる？」

「ひょっとして、海音ちゃん？」

互いに信じられなくて、立ちすくんだ。私たちだけ、周りから切り離されたどこか別の空間にいるみたいだった。

私は、小学五年生から中学一年生までの三年間、親の仕事の関係で香港に住んでいた。再会した彼女は、同じ敷地内の建物に住んでいて、毎朝、同じバスに乗って学校まで行っていた。放課後は互いの家に行き、宿題をして漫画の貸し借りをした。何も知らない香港での生活で、一番初めに仲良くなった、そんな友達だ。しかし、彼女が上海へ引っ越すことになり、中学生になる前に私たちは離ればなれになった。そして、私は帰国して互いに音信不通の状態が続いた。そんな矢先、まさか鹿児島で会

えるだなんて。

「親戚が鹿児島にいて。高校には寮から通うの。」

と、彼女は言っていた。誰一人、同じ中学校の友達がない中で、不安そうなそぶりを全く見せない。笑顔で話す彼女が、昔と何も変わっていないだったので、四年前にタイムスリップをしたかのように思えた。

もし、彼女が別の高校を選んでいたら。もし、私が受験に失敗していたら。数ある高校の中、こうして再会できたのは何かのめぐりあわせだろうか。

もうひとつ、信じられないことを経験した。それは、中学三年生のときだった。

次の授業が理科の実験で、理科室に移動した。私は休み時間、とても眠たくて机に突っ伏しながら寝ていた。後ろの男子が話していた声は、最初は夢の中で聞いているのかと思った。話しているのは、学年で一番に頭が良いい男子だった。

「この前、全国模試を受けたんだけど、珍しい名前の人 が載ってたんだ。ケヴィンっていう。」

私はとび起きて

「もう一回言って！」

と、その男子の肩を揺さぶった。

「ケヴィン、ケヴィンだよ。」

その名前は、小学六年生で同じクラスの男子だった。彼もまた、頭がずば抜けて良く、何度も算数を教えてもら

ったことを覚えている。彼は、中学校に上がる前にシンガポールへ転校してしまった。それから、一度も連絡をとっていない。

それにしても、こんな偶然があるだろうか。私がその休み時間にトイレに行っていたら。その男子が模試を受けていなかったら。私たちが同じクラスではなかったら。このふたつの、一見ありえないような出来事が起きたことで、人と人が出会うとはどういうことだろうと考えることが増えた。

小学校の頃に、算数で割合を習った。そのときに先生が話していたことが印象に残っている。

「一生の間で出会える人数は、何か関わりをもつ人が三万人、同じ学校や職場になる人が三千人、親しい会話をする人が三百人。そして、親友と呼べるくらいの仲になれる人は三人。世界の人口は七十二億人だから、一番多い何か関わりをもつ人と出会える割合でも0.00000416666パーセント。」

黒板にこの数字が書かれると、教室がざわざわとどよめいた。これは、懐中時計を各部品にバラバラに分解した後、全部海に投げて波の力だけで元の形に組み立てられることが起こると同じ確率であるという。

そのように考えてみると、人と人との出会いを奇跡と呼ぶことは全く大袈裟なことではない。むしろ、そうとしか呼べないのではないか。電車で前の席に座った人。

飛行機で隣の席に座った人。同じ人に次、めぐり合うのはいつだろう。

出会いはとても偶然で、それであってとても必然的だ。その人と関われる時間には限りがある。一緒に過ごせる時間を大切にして、出会えたことに感謝しなければならぬ。